

第24回伊豆地区分科会

伊豆の観光ブランド化

■開催/2018年8月24日

■会場/ラフォーレ修善寺・サンパティックホール2F「蒼海」(伊豆市)



サンフロント21懇話会は8月24日、ラフォーレ修善寺で第24回伊豆地区分科会を開催しました。伊豆半島は世界ジオパークに認定され、その恩恵で温泉や海山川などダイナミックな自然に恵まれ、多くの文豪が訪れました。首都圏にも近い位置にありインバウンドの受け入れなどを含め、伊豆の魅力の再発見や伊豆ブランド再構築について考察しました。

基調講演では草津温泉観光協会長の中澤敬氏が「草津温泉の試みから観光と地方の戦略について」と題し、「にっぽんの温泉100選」15年連続第一位の草津温泉の取り組みを紹介し、パネルディスカッションでは中澤敬氏と神山正之氏（静岡県東部地域局伊豆観光局長）、高橋伸佳氏（JTBヘルスツーリズム研究所長）、新名阿津子氏（伊豆半島ジオパーク推進協議会専任研究員）が、ジオからの恩恵と伊豆観光ブランド化について活発な意見交換を行いました。

主催者代表あいさつ



静岡新聞社常務取締役

谷川 治

本日はお忙しい中、こころフォーレ修善寺での伊豆地区分科会へ多くのご出席をいただきましたこと、誠にありがとうございます。

先月、中国四国地方に甚大な被害をもたらしました豪雨災害の被災者にお見舞いを申し上げ、一日も早い復興をお祈りいたします。

今年は本当に暑い夏で、直撃する台風もあり、残暑が続く中、本格的な秋の到来はもう少し先になるかと思われます。

さて伊豆半島は今年、世界ジオパークに認定されました。ジオによる豊かな自然の恩恵として温泉や食など観光資源が伊豆半島には数多くあります。これらは世界に誇れるものでありますが、保全と活用の両面を考えていかなければなりません。

こうした中、サンフロント21懇話会としても本日の伊豆地区分科会をはじめ、さまざまな会議でこのテーマについて追っていきたいと思っています。

本日は草津温泉のブランド化を導かれた観光協会長の中澤敬様の基調講演に続き、ジオからの恩恵と伊豆観光ブランド化と題したパネルディスカッションを行い、お越しいただいた多方面のパネリストの皆様が大いに語っていただこうと思っております。

サンフロント21懇話会は今年で24年目を迎えました。さまざまな提言、地域への支援活動を継続できたのは、ひとえに会員の皆さまのご支援のおかげであります。あらためて感謝申し上げますとともに、一段のご協力をお願いする次第でございます。

開催地代表あいさつ

本日は伊豆市へお越しいただき、ありがとうございます。ご承知の通り伊豆はジオパーク認定で盛り上がっております。ユネスコがなぜできたかという、第二次世界大戦後、戦争は兵器ではなく人の心の中で生まれるということから、教育や科学技術を通じた世界交流から平和を維持しようと発足したものです。

伊豆半島は約2000万年前、今の西ノ島と同じように硫黄島の近くの海底火山によって生まれました。硫黄島といえばアメリカの国立墓地に行きますと硫黄島に星条旗を掲げる有名な像があります。硫黄島の戦いは、世界の戦争史上で唯一、攻撃側のほうが防衛側よりも被害が大きかった戦いでした。そこから生まれた伊豆半島が日本列島に衝突し、人の心の中から生まれる戦争を抑止し、平和を維持するためにジオパークという枠組みで、伊豆半島の繁栄と世界平和に貢献できるというのは本当にやりがいのある仕事です。そんな思いで、ここ数年、国際会議に出席しています。

ジオパークは観光、文学、絵画や芸術、そして防災とも非常に相性が良い。まさに伊豆半島のためにある事業だといってもいいでしょう。もしジオパーク事業が伊豆半島で上手くいかなかったら、事業そのものが難しいだろうと思うほどです。

今も数多くの観光客に来ていただいている伊豆で、ジオパークの本質や特性をご理解いただくことは、私どもの使命だと思っています。本日はどうぞよろしくお願いいたします。



伊豆市長

菊地 豊

基調講演

「草津温泉の試みから観光と 地方の戦略について」

一般社団法人草津温泉観光協会長、前草津町長

中 澤 敬 氏



草津節への思い

みなさまこんにちは。伊豆地区の皆さまに草津温泉の話ができるというのは大変ありがたいことです。何と言いましても天下の伊豆。東京から大阪のゴールデンルート上に有する観光温泉は、そんじょそこらの歴史とは違うものをお持ちです。そんな中、私も草津温泉が15年連続で日本一に選ばれたということで、伊豆の皆様から何があるんだろうと興味をもっていただけなのは非常にありがたいことです。今日は草津が今まで歩んできた道や今後目指すべき道についてお話をさせていただきますが、地方の戦略とは日本全体で考え、いろいろな情報交換をし、観光産業が日本のリーディング産業になるにはそれぞれの地域が頑張ることが一番大事です。そのような観点からお話させていただきますと思います。

まずはお近づきのしるしに草津節をご披露させていただきます。

♪ 草津よいとこ一度はおいで ドッコイショ
お湯の中にもコリヤ 花が咲く
チョイナチョイナ

これは私がよくやるアイスブレイキングでして、初対面の相手には、氷を砕くように壁を取っ払い、気さくに話そうというしかけであります。

古くから伝わるものを、今も多くが知っている、と思ったら大間違いです。3年ぐらい前に一橋大学で700人ぐらいの学生を前に地域の政策を考え

るテーマでお話ししたとき、若い人がこの歌をどれくらい知っているか、披露してみました。3割ぐらいかなと思ったのですが、知っていると手を上げたのは10%未満でした。

草津節は昭和のはじめにNHKが全国放送してくれて、温泉唄として浸透しました。戦後はいかりや長介とドリフターズが「ババンババンバン」と知らしめてくれました。唄を通して草津というブランドが作られたわけですが、しばらく唄が歌われなくなると、若い世代から「聴いたことない」と言われてしまう。そこで、草津温泉では4年前に「湯もみダンス選手権」というのを始めました。湯もみとダンスを採り入れれば、ヒップホップでもフラダンスでもフラメンコでもジャズダンスでも何でもいいという条件で、踊りを通して草津温泉を表現してもらうコンテストです。湯もみ唄の新バージョンもつくりました。これも、「草津よいとこ一度はおいで」の正調草津節を伝えるための手段です。4年目を迎えたダンス選手権は海外からも参加者がいます。

このように、誰もが知っているだろうと鶴呑みにしていたことが、本当はきちんと知らせる努力をしていなかったゆえ、知られていなかったという反省をもとに、さまざまな戦略を立てています。

『歩み入る者にやすらぎを 去り行く人にしあわせを』

草津町は群馬県の北西部に位置する広さ50キロ㎡、人口6400人という小さな町。ここに年間で320万人の観光客が訪れます。町民の9割が観光産業に従事しており、なんだかんだ言っても、工業や農

業や観光やらと産業がバラバラ存在する町よりもまとまりやすい規模かなと思います。町民には「草津は標高1200mにある。スカイツリーの2倍の高さに住んでいるんだと自慢しよう」と言っています。そんな群馬県の北西部の小さな町で、年間320万人のお客様を迎えています。

毎年、観光経済新聞社が発表する「プロが選ぶにっぽんの温泉100選」では、おかげさまで15年連続日本一に選ばれました。私の町長在職時に最初に第1位をいただいたことから、どうして連続日本一を続けてこられたのですかとよく聞かれます。一番大きな要因は、地域のまとまり。地域がまとまっていなければ何をやってもなかなかうまくいきません。行政、議会、民間3団体（旅館組合、商工会、観光協会）の5組織がつねにいろいろな話をしながらフットワークよく行動できることが大きいですね。

町長在職時に最初に日本一になったときは、小泉政権下の緊縮財政でバブル崩壊後、お金もなく投資マインドも冷え切って何もできないという時代でした。そういうときに出来ることといたら人づくりです。いわゆる箱モノづくりから心づくり、自己管理・自己責任、共生・共創・協働というキーワードのもと、モノの豊かさばかりでなく精神的な豊かさを充実させようというスローガンを掲げ、町長選にも臨みました。そして作ったのが町民憲章です。

講演に呼ばれると、会場で若い人に、どちらにお住まいですか？あなたの町の町民憲章、市民憲章は何ですか？と聞いてみます。9割の人は知らないという返事。我が町もそうでしたが、投資ができない時代に大切なのは、人づくり心づくりを成長させることが町民のためだと考え、「歩み入る者にやすらぎを 去り行く人にしあわせを」という町民憲章をつくりました。これは草津温泉を愛された日本画家の東山魁夷先生に昭和54年にいただいた言葉です。

よく考えてみれば、この言葉は観光産業の町なら誰にとっても必要な理念です。人が相手のサービス業には、とかく面倒だと思ふことも多々ありますが、この言葉があることによって、お客様に「楽しかった、良かった」と言って頂くことがバイブルのように大切だ、心に常に刻むことが重要だと再認識できるのです。

町民憲章理念実践5原則

町民憲章はただ言葉を並べるだけでは意味がありません。具現化していくために、町民憲章理念実践5原則として、①町の安全、②町の清潔、③町の親切、④町の販売、⑤町の節約を設けました。

①の安全に関しては町の現状で出来ていること、出来ていないことを町民同士で委員会を作って話し合ってもらいました。②の清潔に関してはお客様が来たとき、町がみすぼらしくてはいけない、よりよい美しい町にするにはどうしたらいいかを考えた。③の親切に関しては喜んで帰っていただくには何をしたらいいかとことん話し合いました。④販売では、町民全員に町のセールスマンになってもらおうと、一人一人に名刺を持ってもらった。町で春夏秋冬の名刺の台紙を作り、町民に提供しました。⑤節約ではモットイナイを実践する。これら試みはおかげさまで今、それぞれの事業の方向性に活かされています。

『歩み入る者にやすらぎを 去り行く人にしあわせを』はドイツ好きの東山魁夷先生が、ドイツ旅行帰りに草津で休暇を取られたときに教えていただいた言葉で、ドイツのロマンチック街道にあるローテンブルグの城壁に刻まれたラテン語『PAX INTRANTIBVS SALVS EXEVNTIBVS』を先生ご自身が訳されました。中世の時代、戦争ですべての門が閉ざされていたとき、負傷をした敵兵を門の中に入れて介抱し、元気になったら送り出したというエピソードから生まれたそうです。この言葉に感動し、ロマンチック街道にちなんで日本ロマンチック街道（長野県上田～軽井沢～草津～日光宇都宮）を制定し、今年25周年の記念でドイツからも訪問があるようです。

観光立町への取り組み

次に取り組んだのは、観光立町の実現です。平成18年に日本は観光立国宣言をしました。輸出で外貨を稼いで発展してきた日本は人件費の高騰によって輸出が難しくなり、国内企業の多くが海外に製造拠点を移し、思うように外貨を稼げなくなった。そこで目を付けたのが観光です。

これを受け、草津町では平成19年6月、観光立町推進条例を全国2番目（1番目は河口湖町）

に作りました。基本的に国と同じような歩みで観光立町としての基本となるものを決めておく。時代の潮流に流されそうになっても、基本はここにあるという条例を持つことが大事だと考えました。

観光立町として発展させる上での基本的な考え方は、お客様に喜んでいただくための町づくりです。平成21年には景観条例を改定しました。平成5年から景観条例は設けてありましたが、これをさらに練り込もうと、町長職を終える直前に着手し、着々と進行しています。草津町の町民憲章・推進条例・景観条例を戦略に、次は戦術をどうするかです。戦術ばかりを小手先ばかりでやっては時代時代に流される、戦略ありきの戦術が大事だと考えました。そこでテーマになるのがブランドづくりです。

ブランドとは銘柄、商標、品質とされますが、ブランドを取り巻くエクステンションをどのように振りまいてくかが重要ですね。私が考えるに、ブランディングとマーケティングは別だと思っています。マーケティングは市場調査をしてお客様の声を聴きながら、我々から推して出ていくというのですが、ブランディングは決して推すというのではなく、ここでじっくり構えて自分たちの価値を高めるといふこと。草津町はブランドという観点から皆で話し合い、一つの戦術として取り組みました。

ブランドを守るためのマッチ&ミスマッチ

草津町のブランドとは、ずばり温泉。Ph1.8～2という強い酸性で殺菌力もある特異な泉質です。この泉質と源泉の状況をきちんと把握するため、湯量のモニタリングをしっかりと行っています。温泉は昨今、地熱等の代替エネルギーとして注目され、温泉に影響しないように深く掘ればいと国はさかんに勧めますが、温泉地域の人々にとって湯量に少しでも変化が生じれば死活問題につながります。実際に湯量が減って経営困難に陥った温泉町もあるのです。草津町では温泉を町民一致で未来永劫、地域ブランドとして守っていこうと意思統一しました。

温泉ブランドを売っていくためのエクステンションでは、温泉にマッチしたものと、温泉とはミスマッチなものを取り込む必要があります。

まず温泉にちなんだものといえば草津節。温泉

まんじゅう、湯もみと踊りもブランドを高める手法の一つで、毎年8月には草津温泉感謝祭という草津すべての源泉に感謝する珍しいお祭りも開催しています。

ミスマッチな例としてはスキー場の開発。草津は日本の温泉町では初めてスキー場の開発に着手しました。世界一流の音楽家が集まる草津音楽アカデミーは今年39回開催しています。温泉にはおじいちゃんおばあちゃんしか来ないのに、なぜクラシックコンサートなのかと議会でも紛糾しましたが、39年続けているうちに10年連続で天皇皇后両陛下がプライベートでお越しになるほどのイベントになりました。両陛下が10年連続でお越しになる場所は他にはないそうです。主に極東地域で音楽を学ぶ学生さんたちの研修を昼間行い、夜のコンサートでは学生を指導する音楽家25人が他では実現不可能なアンサンブルを披露してくれます。とくに皇后陛下はピアノを勉強されており、夜のコンサートにもご参加いただいています。

このような、一見、温泉とは関係のない事業が、草津の文化度向上にもものすごく役立っています。もちろん、文化事業を継続するというのは大変難しく、町から2800万円の補助金をいただいています。もっと他に使うべきところがあるのでは、という意見も確かにあります。

サッカーW杯日韓大会を機に誕生したザスパクサツ群馬は、草津で毎年夏合宿をし、なんとか頑張らしてJ2リーグに昇格してもらいたいと願っています。ぜひスポーツを通して草津温泉に興味をもっていただきたいですね。

最近では湯畑ライティングと西の河原公園ライティングが話題になっており、ユーチューブ等でも発信しています。草津のシンボル湯畑は、温泉が熱すぎるため、空気を通して源泉を引く知恵として行っていたもので、今は多少温度が下がっているのでもうここまでやる必要はないのですが、世界にも類のない施設として平成29年度国交省の都市景観大賞を受賞し、文科省から名勝天然記念物にも指定されました。

ブランドは温泉。エクステンションはブランドを高めるための手法です。ブランドそのものは保守的にきちんと維持し、動かさない。しかしながらブランドエクステンションまで保守のままだと古臭くなる。つねに進化させていくことが重要で

す。伝統を維持するためには革新であれ、つねに終わりはないので。とかく来客数ばかりに気を取られ、湯量や泉質に興味を持たない人が増えていますが、我々のブランドは源泉であるということを忘れてはいけません。

これからのブランドエクステンション

今後の方向性として、温泉とマッチするものでは再生可能エネルギーの調査研究が挙げられます。地熱を掘るのは反対ですが、出ている温泉の熱利用は取り組まなければなりません。モットイナイ精神から見れば、源泉かけ流しは贅沢ではなく無駄遣いだという声もあります。お客様の前ではかけ流しをしても、見えないところで湯の熱量を効率的に次のエネルギーにつなげようと、現在、ロードヒーティングに取り組んでいます。道路の下に温泉を通して雪を溶かし、幹線が雪止めにならないようにという工夫です。また温泉熱で水を温め、50℃の温水を7割ぐらいの家庭に配水しています。昨今、原発の問題等から再生可能エネルギーが注目されていることから、さらに一歩進んだ取り組みが必要になるでしょう。

“歩きたくなる観光地づくり”にも取り組みたいと思っています。昔は温泉町にも商店街がありましたが今はさびれてしまい、お客様はいったん旅館に入ったら町に出てこない。食事の後、あるいはチェックインの前後に湯畑を散策して温泉情緒を楽しんでほしいですね。

歴史文化の掘り起こしや食文化についても再考します。草津は山の中の温泉町ですから食材は限定的です。ひところの旅館は豪華絢爛な食事が売りでしたが、1食で2500Kcal超の食事を毎回出しているのは、お客様もたまったものではありません。もちろん記念日的なハレの食事を楽しむということも大事ですので、ハレの食事を楽しんでいただいた後はそれを消化していただく試みや、食事を通して健康について考えていただくきっかけになればと思います。そして草津に行けば健康になれる、何度でも行きたくなる、とっていただきたい。

AIコンシェルジュのスタート

これからはONSENという言葉の世界語にしていこうと思っています。温泉はホットスプリング

やスパと訳されますが、タオルを頭の上に乗っけて気持ちよく全身を伸ばすあの感覚は、ONSENでなければ表現できません。

日本は自動車産業が基幹産業として経済を支えてきましたが、EV登場以降は中国の後塵に甘んじている。今後、輸出が期待できなくなるとすれば、何で国力を高めるか。まずは、日本に観光に来ていただいてお金を落としてもらうということです。草津のインバウンドはまだ7%程度ですが、日本国内の人口は確実に減るわけで、世界の中で最も早く高齢化が来る。今はまだお客が来ているから無理してインバウンドへの対応をしなくてもいいと油断していたら、ゆでガエル化してしまうでしょう。

アジアの人にはONSENの意味は伝わりやすいのですが、欧米の人にはまだまだです。日本人に対してしてきたサービスと対外国人とはまったく違います。今後はクラウドコンピューティングによるマーケティング調査やインバウンドブランディングというものも重要になるでしょう。インバウンドへの取り組みは北海道、別府、九州、箱根等ですでに進んでおり、数多くの外国人が訪れています。政府は訪日外国人観光客を今年3000万人弱、2年後に4000万人、2030年までに6000万人にしようと言っています。

草津温泉が9月1日からリリースするのは、AIコンシェルジュの導入です。サービスのスタンダード化ですね。草津温泉に来る前、草津に何があるのかAIに語らせ、各旅館や施設にどんな特徴があるのか多言語対応させる。旅前、旅中、旅後のフォローもAIにやらせませす。1～2年後には、AIに置き換えられるサービスはAIにまかせ、人でなければ出来ないサービスに人材を投入できるようにします。

ONSENで世界平和を！

観光庁が推進するDMO (Destination Management/ Marketing Organization) は、観光産業に従事する人間にとって非常にありがたいことです。観光業は今まではどちらかといえば、人の顔色を見てお金をもらう職業だと、旅館で育った私も小さなころから言われ続けてきました。人の顔色を見るといっても銀行等のお堅い職業に比べ、土農工商的な偏見がありました。しかし政府がDMO

という観光地が潤うための組織を立ち上げようと呼びかけた、というのはすごいことです。

草津温泉の魅力をストレートに伝える動画も発信しており、おかげさまでショートショートフィルムフェスティバル&アジア2017で観光映像大賞ファイナリスト10作品にノミネートされました。

雇用環境については人材不足によって商売ができなくなるというネックが生じており、ヨーロッパでもフランスやドイツ等で同様に大問題となっています。どのように解決していくかは外国人労働力の問題を含め、考えねばなりません。なぜ観光協会で人手不足を考えるのか？と言われますが、人手のことを考えなければ商売は出来ない時代だという意識です。

草津の強みはなんといっても温泉の泉質であります。これからはより多くの温泉地と手を組み、情報交換をしながら、日本の温泉を海外にどんどんアピールしたいと思っています。日本人は神と仏が一つになった時代があり、宗教への障壁があ

りません。一方で世界では宗教対立による戦争も起きている。世界平和のために温泉が貢献できないものだろうかと考えます。イスラエルとパレスチナの指導者が安倍首相と一緒に伊豆の温泉にでも入ってくつろげないものだろうか。ONSENとはそれくらいの恩恵を我々に与えてくれるものです。ぜひ世界にアピールしたいと思っています。

《講演者の略歴》

【講演・パネラー】

中澤 敬 (なかざわ・たかし) 氏
草津温泉観光協会長、前草津町長

1949年群馬県草津町生まれ。72年立教大学社会学部観光学科卒業後、77年スイスホテル協会ローザヌホテルスクールを卒業。96年中沢ヴェレッジ専務取締役、98年草津温泉旅館協同組合理事長に就任。2002年草津町長に就任し、草津町全体を温泉テーマパークとして、楽しく魅力ある町づくりに取り組む。05年観光庁の「観光カリスマ百選」に選出される。11年中澤ホールディング代表取締役。14年草津温泉観光協会長に就任し、草津の観光客の誘致を図っている。



「ジオからの恩恵と伊豆観光ブランド化」



〈パネリスト〉

神山 正之 氏 (静岡県東部地域局伊豆観光局長)
高橋 伸佳 氏 (JTBヘルスツーリズム研究所長)
新名阿津子 氏 (伊豆半島ジオパーク推進協議会専任研究員)
中澤 敬 氏 (草津温泉観光協会長、前草津町長)

〈コーディネーター〉

中山 勝 氏 (企業経営研究所常務理事、サンプロント21懇話会TESS研究員)

観光は地域の総力戦

◆中山 伊豆地区分科会は今まで観光をテーマに



中山 勝氏

議論を重ね、
前回は日本遺産を取り上げています。今年の世界ジオパーク、わさびの世界農業遺産の認定と、伊豆に新たな宝物が増えました。今日

日は県内2名、県外2名のパネリストからご意見をうかがい、今後の伊豆観光のブランド化について考えていきたいと思っております。

◆神山 伊豆地域の観光交流客数（宿泊客十日帰り客）を見ますと、宿泊客数は東日本大震災で大きなダメージを受けた平成23年を底辺に、今は、その前年平成22年よりも上回る実績を上げています。東海道沿線、とくに熱海市は大きく数字を取り戻しており、それ以外の市町は戻り方が緩く、もう少し頑張れるかなと見ています。

平成24年に新東名が開通、25年には富士山、27年には韮山反射炉が世界文化遺産に認定されました。26年には圏央道が開通し、北関東の誘客も伸びています。そして平成27年には三島スカイウォークの開業と、交通アクセスや大型新施設によって、東日本大震災という未曾有の災害からの復活を遂げています。

静岡県全体では約4割、伊豆に限ってみれば約7割が首都圏からの観光客です。したがって伊豆地域では今後も首都圏向けの観光情報発信が重要になります。中澤会長よりインバウンドのお話がありましたが、伊豆も草津同様、インバウンドは約7%程度と、国交省中部運輸局管内では一番下です。愛知や岐阜は10%ですから、中部運輸局からはさかんにハッパをかけられています。今後、少子高齢化の進展で市場が縮小する中で、どこからお客様を連れてくるかをしっかり考えねばなり

ません。

2019年はラグビーW杯、2020年には東京オリ・パラの自転車競技開催と、これまでにない情報発信の機会が控えています。来春には静岡県DCも開催されます。県としても地元の皆さまと一緒に取り組んでまいります。

◆中山 局長ご自身は伊豆を廻ってどのような感触をお持ちでしょうか？

◆神山 絶好の機会を逃さないようにという気概を感じます。従来の行政や観光協会以外に交通業者や農業関係者等も共に観光を巡る環境変化に対応しようと頑張っておられますね。観光は単なる物見遊山ではなく、地域の魅力をいかに打ち出していくか、地域の総力にかかっていると実感しますね。

世界ジオパーク認定を受けて

◆中山 中澤会長の基調講演の中にも、地元の人が地元を知っておかねばというお話がありました。新名さんジオパークについてはいかがでしょうか？

◆新名 今年4月、伊豆半島ジオパークはユネスコ世界ジオパークに認定されました。認定直後は推進協議会の菊地会長や川勝知事をお迎えし、皆でお祝いをしました。ユネスコのHPをご覧になると、大室山の写真と伊豆ジオパークが大きく紹介されています。

世界ジオパークは38カ国140地域が参加するネットワークです。認定を受けると地形や地質をはじめとした自然遺産、地域文化の保全保護、教育やツーリズムへの活用が求められます。そもそもジオとは古代ギリシャ語でガイア（地球）。ジオパークとは地球＝大地の公園という意味です。世界自然遺産との違いは、守るばかりでなく教育やツーリズムに活用するという点。しかも次世代に継承するため、環境にマッチした持続可能な取り組みが求められるのです。

世界の事例を紹介しますと、アフリカでは2か所、タンザニアとモロッコに世界ジオパークがあります。彼らがジオパークに取り組むのは、保全活動、教育、ツーリズムによって地域に平和を取り戻し、暴力と貧困の生活から脱却するため。幹

線道路が1本整備されただけで生活が激変し、観光客がたくさん来るようになった村もあります。

伊豆半島ジオパークに参加する15市町は面積2027キロ㎡で人口は約66万人。フィリピン海プレートの最北端に位置し、このプレートがユーラシアプレートに沈み込んで、本州に衝突しています。今も毎年4センチずつ陸地は動いており、地震も火山噴火もしばしば起きます。

インド大陸は南からずっと移動してきてユーラシア大陸にぶつかり、ヒマラヤ山脈が誕生したわけですが、伊豆半島も同じで、もともとは2000～1000万年前に生まれた海底火山で、噴火活動を繰り返しながら本州に衝突した。そこから陸上の火山群が活発に活動し、天城、箱根、大室山等を作りました。46億年の地球の歴史から見れば非常に新しい火山島ですが、それが多くの恵みをもたらしています。

歌で有名な浄蓮の滝。もともと1万7千年前に火山から流れ出た溶岩が作った美しい山肌に流れる滝です。滝そのものは保護指定されていませんが、周辺に群生するシダ類が天然記念物に指定されています。

ロッククライミングで知られる城山は、海底火山の時代の層が現れたもので、まさにマグマの通り道。地球の活動の記憶を深く刻んだ貴重なジオスポットですね。

伊豆スカイラインの黒岳から見た丹那盆地は、一粒で何度もおいしい景観です。丹那断層というのは定期的に動いており、過去8000年間に9回動きました。必ず800～900年ごとに2mぐらい断層がズレて地震を起こします。これが丹那盆地を作り、美味しい牛乳が飲めるようになったわけですが、前は昭和5年の北伊豆地震、次はおそらく800年ぐらい後に起きます。皆さま子孫に必ず言い伝えてくださいね(笑)。

富士山は10万年、愛鷹山は30万年と比較的新しい火山ですが、噴火活動を行い、三島の駅周辺までダラダラと溶岩が流れました。お隣の丹沢山地は伊豆半島が本州に衝突したときに押し込まれて隆起したもので、今でも隆起しています。この景色、一度で一粒も二粒もおいしいのですが、残念ながらこの景色を見てテンションが上がるお客

様は少ないので(苦笑)、そういうお客様をいかに増やすかが我々の使命だと思っています。

おかげさまで伊豆半島ジオパークミュージアムの来館者は2.4倍ペースで増えており、グーグルマップの口コミ評価でも4.4という高評価をいただいています。取材や講演依頼も増えており、今後ますます認知度アップに注力していきたいと思っています。

伊豆は日本一のヘルシー半島

◆中山 サンフロント21懇話会では、これまでかかりつけ湯を取り上げてきましたが、高橋さんに改めてヘルスツーリズムについて解説していただくと思います。

◆高橋 JTBでは実は40年前から健康について考



高橋 伸佳氏

えてまいりました。日本はこの先、人口超々急減時代に入ります。そんな時代の観光施策は3つしかありません。単価を上げる、究極のリピーター

をつくる、滞在日数を増やすということ。ヘルスツーリズムはこのすべてに整合するソリューションになります。

全国には同じ温泉旅館に300回リピーターしたという事例もある。東京で病を治療し、伊豆でリハビリするというスタイルも商品化できるでしょう。ピンとこない方もいると思いますが、日本以外のアジア各国や欧米では、ツーリズムといえばヘルスツーリズムなんです。先ほどの3項目も当たり前。日本の観光業界もようやく認識するようになり、皆さんがよく利用されるビジネスホテルでも、最近では朝食に「健康」をアピールする施設が増えたと思いますが、実感されませんか？コンビニでもファミレスでもカロリー表示が増えている。社会全体がそうですから、観光業界が乗り

遅れてはならないのです。

JRのDC（ディスティネーションキャンペーン）で“大人になったらやってみたいこと”として、吉永小百合さんが信州の森林の中でノルディックウォーキングをされているコマーシャルが作られたように、旅の進化系はヘルスツーリズムにあるといわれます。

2016年度から健康立国を目指している日本において、ヘルスケア産業は2025年に33兆円産業になるという予測値が出ています。この中で「遊」「学」の項目は3兆2000億円。うち10%が運動・栄養・休養のバランスを提供するヘルスツーリズム事業として期待されます。これは日本全国、どんなド田舎でもできる事業です。

厚労省関連の医療施策にも入っており、メタボ対策として宿泊施設でグループでの保健指導、新湯治のライフスタイル等が提案されています。スポーツ庁からは運動嫌いの解消のための旅の提案。伊豆はこれらをものすごく推進しやすいポテンシャルを持っています。

◆中山 そのポテンシャルをブランド価値としてどう高めていくべきでしょうか？

◆高橋 伊豆はなんといっても東京から近い。これはブランドを作りやすい大きな強みです。たとえばヨーロッパでは喘息のお子さんたちがタラソテラピーで海岸を歩いています。これが伊豆でできる。東京ではできない気候療法です。100キロ圏外の転地療養はヨーロッパでは保険適用にもなっています。伊豆は「日本一のヘルシー半島」になれる。需要はすぐそばにあります。

ジオパークで伊豆をひとつに

◆中山 草津ではブランド価値を作る前に、構想をしっかりと作ったのですね。

◆中澤 町民憲章の理念実践5原則「安全」「清潔」「親切」「販売」「節約」を進めるため、現状で出来ていることと出来ていないことを委員会で洗い出しました。

出来ていないことについてはどうやったら改善できるか話し合いました。たとえば温泉は、お客様は旅館で利用できますが、町民のための共同浴

場が18カ所あり、いつの間にか観光客がどんどん来るようになって町民が犠牲になり、観光客を排除するような動きもあった。もともと草津には住民が旅館施設にもらい湯に行く習慣がありました。そこで観光客の皆さんにも「共同浴場にもらい湯に行くという気持ちで、マナーを守ってもらえませんか」とお願いしました。こういう具体的な取り組みが少しずつ浸透し、さまざまな問題の解決につながりました。この5原則はどんな企業にも通じるのではと思います。

◆中山 伊豆にはたくさんの市町がありますので、まずは話し合いが必要ですね。

◆中澤 人口減少の中、伊豆地域全体として観光



中澤 敬氏

産業をどう考えるかは、おのずから話し合わなければなりません。コミュニケーションがとれないままズルズルいったら「めでガエル」にな

るといことです。伊豆は確かにゴールデンルートに在って資源や環境に恵まれた羨ましいところですが、いいものがあればあるほど、昔の繁栄を拭えず、先に進む時には必ず争いが生じると感じます。組織の改編を行い、次世代と一緒に取り組み、上手にバトンタッチをしようという思いがなければ、地域はうまく回りません。世界ジオパーク認定やヘルスツーリズムの推進は、地域がまとまる絶好の題材だと思います。

◆神山 伊豆の地域住民をこれだけ巻き込んで始まった活動というのは、初めてじゃないでしょうか。世界ジオパーク認定は本当にありがたいことだと思っています。こういう活動を通して地域に誇りを持つということが大事です。

伊豆文学とわさびをジオにつなげる

◆中山 ジオパークを文化と融合させると地元

落としやすいと思うのですが、どういう形が望ましいでしょうか？

◆新名 ジオパークは当初、地質学や火山学の先



新名 阿津子氏

生方がリーダーシップを取られて献身的に活動されてきましたが、地形や地質だけでなく、大地に根差した文化を一緒に取り込んで守るとい

のがジオパーク。そう考えると伊豆半島をみればアドバンテージしかありません。

私が現在、取りまとめている文学目録をみると、「伊豆半島は博物館だ」と称した川端康成の存在は欠かせません。昭和の森会館にある伊豆近代文学博物館は今、外国人観光客が増えています。海外でも人気の『伊豆の踊子』やノーベル文学賞受賞者である川端を知ろうと来てくれている。今後は多言語での解説も必要でしょう。

観光需要は時代とともに移ろいますので、その都度ブラッシュアップをしていかなければなりません。伊豆文学ゆかりの地を訪ねる散策路も整備されていますので、それらもアピールしたいですね。三島由紀夫が描いた黄金崎を訪ねるツアーなら、同時にジオの解説も出来ますので、黄金崎の価値はさらに高まると思います。

◆中山 高橋さんが提唱するヘルスツーリズムにもつながりますね。

◆新名 現地を歩いてみたいというニーズはとても高い。歩くという運動と美味しいものを食べることはヘルスツーリズムそのものだと思います。

◆中山 わさびの世界農業遺産認定はどう生かすべきでしょうか。伊豆では独特の畳石式栽培方法が生まれましたが。

◆神山 わさびとジオパークは親和性が高く、2つを結び付けることは有望です。和食が世界無形遺産に認定されていますので、国内のみならず世界にもアピールできるコンテンツです。わさび栽

培については、地元の人知らないことがまだまだ多い。活用の前にまず知って守るという意識付けが大切です。まさにジオパークの理念ですね。

地域住民の議論は不可欠

◆中山 高橋さん、地域ブランドづくりでの参考事例をいくつか挙げていただけますか？

◆高橋 私が関与しているプロジェクトを2つ紹介します。岡山県玉野市ではブランドイメージ調査をしたところ、瀬戸内での認知度が最下位でした。隣はブランド化に大成功した香川県の直島です。そこで、玉野市では玉野という名前へのこだわりを捨て、ここは瀬戸内全体の起点のまちだとアピールしたのです。固有コンテンツも大胆に変えました。玉野市には玉野競輪があるのですが、競輪場で健康をテーマに競輪選手にチャリンコを学ぶというプログラムを作ったのです。地域住民向けのサービスですが、市民を巻き込んで大いに盛り上がりました。これらは市民同士がひざ詰めで話し合っ

て企画したのです。滋賀県が健康長寿ナンバーワンになったってご存知ですか？滋賀県ではあらゆる既存事業に「健康」という冠を付けた。SDGsのように健康価値や健康の視点で県の事業を洗い直し、行動目標に落とし込んだ成果が、健康長寿日本一というわけです。

◆新名 伊豆半島の可能性はいくらでもあると思います。大きいマーケットが近くにあり、文学あり、温泉あり、金目鯛、深海魚、わさび、牛乳等々ないものはないぐらい恵まれた土地ですが、ブランドが乱立しすぎている気がします。それらを伊豆半島の中で誰が統合し、伊豆ブランドとして再編成するのか。個人的にはジオパークだと思います。その際、草津や滋賀や玉野のように、地域住民が議論することが大事です。ぜひ15市町が集まってジオをキーワードに半島の未来を考える会議をやってみたいですね。

◆神山 皆さんで意見と戦わせ、将来を考えるのはとても大切です。中澤会長の、若い人にお任せするというお話にはとても感銘しました。ブランドを作るにしても、人が担うことになります。人

づくりは一番大事ですし、伊豆には有能な人材がたくさんいますので、ぜひ活用していただきたいと思います。

◆中山 草津で活躍されている若い人というのは行政官ですか？

◆中澤 民間です。草津の場合、旅館組合と商工会があり、それに全体の観光を扱う観光協会があります。それらで若い人材が活躍しています。

人づくりにかける

◆中山 最後にお一人ずつ伊豆のブランド化が一番大切だと思われることをお願いします。

◆神山 まずは人づくりです。人が何かをやること



神山 正之氏

ことで動く。しかも次代を担う若者に活発に動いてもらう。他の地域から伊豆に来て活動している人もいます。そういう人とも連携していきたいと

思います。

◆高橋 サービス業全体に言えることですが、観光業はリサーチが弱いような気がします。アンケートをやっても出てこない声なき声がある。伊豆ではこういう人を呼びたいという個に焦点を当て、徹底的にロングインタビューし、キーワードを抽出する定性調査をぜひ行ってみてください。

ヘルスツーリズムは、やせるとかきれいになるということばかりではありません。自分自身に自

信をつける、自慢したくなる、というキーワードも出てきます。もっともっと新しい価値に目を向けてみてください。

◆新名 世界ジオパークにせっかく入りましたので、ぜひ世界の他のジオパークを観て参考にするなど、認定のメリットを最大限に活かしてください。人づくりでいえば、若者のみならず、女性の活躍や地位向上、就労環境の改善にも取り組んでいただきたいですね。

◆中澤 今まで地域の実行部隊として、どちらかといえば経験や勘と度胸で物事を進めてきました。しかしながら高橋さんのお話にあったように、全産業レベルで考えれば新しいシステムを採り入れていかなければ、時代を読み切ることはできない。地域の中で君臨している重要ポストの人が、経験と勘で動いているうちはうまくいかない。幅広い考え方で取り組むことが必要です。

たとえば日本全体ではキャッシュレスが遅れています。草津では、1週間滞在して10万円払うのに現金しか使えないのはどういうことかとお叱りを受けたケースもありました。中国やイギリスでは無人のスーパーマーケットも増えているというのに、日本ではようやくセルフレジが出始めたという段階。今後はインバウンド推進に向け、AI等にも重点を置くべきでしょう。

まずは地域の中で仲良くすることが肝要です。仲良くといっても、お互いの傷を舐め合うというのではなく、建設的に意見を戦わせ、まとめる習慣をつける。それをやらないと地域はうまくいきません。経験と勘と度胸の上にシステムを加え、地域の中で徹底的に議論していただきたいと思います。

◆中山 本日はありがとうございました。

〈出演者の略歴〉

◇パネラー

■神山正之(かみやま・まさゆき)氏 静岡県東部地域局伊豆観光局長
1961年静岡県生まれ。大学卒業後85年静岡県庁入庁。以後2010年産業部観光政策室専門監、14年 文化・観光部観光振興課長、16年 経済産業部研究開発課長を経て、17年文化・観光部伊豆観光局長、18年より現職。

■高橋伸佳(たかはし・のぶよし)氏 JTBヘルスツーリズム研究所長
順天堂大学大学院、明治大学専門職大学院で学ぶ。(株)コーセーを経てJTBグループ・ジェイコム入社。2005年ヘルスツーリズム研究所を立ち上げる。日本経団連ヘルスケア産業部会などの公職も務め、現在琉球大学観光産業科学部非常勤講師を兼務。

■新名阿津子(にいな・あつこ)氏 伊豆半島ジオパーク推進協議会専任研究員

高知県生まれ。2009年筑波大学大学院生命環境科学研究科修了(理学博士)。財団法人とっとり地域連携・総合研究センター研究員を経て、12年公立鳥取環境大学講師・准教授。18年から現職。専門は経済地理学・ジオパーク研究。

◇コーディネーター

■中山 勝(なかやま・まさる)

企業経営研究所常務理事、サンフロント21懇話会TESS研究員
慶応義塾大学大学院経営管理研究科修了。スルガ銀行入行後、1982年企業経営研究所へ出向。研究員、主席研究員を経て、2000年部長、08年より現職。静岡県、沼津市、三島市などの委員や日本大学国際関係学部非常勤講師なども務める。1958年静岡県生まれ。

『2018年度総会』

地域創生につながる新産業創出を支援

2018年5月23日 会場／みしまプラザホテル



サンフロント21懇話会（代表幹事・岡野光喜）は5月23日、三島市のみしまプラザホテルで2018年度総会を開催しました。会員の企業経営者や市町長、行政関係者ら約150名が出席し、中長期的な活動方針の項目として「地域創生につながる新産業創出を支援」など4項目の承認を得ました。

この後、NHK大河ドラマの「西郷（せご）どん」の原作者で、作家の林真理子氏に「私の仕事から」と題して記念講演をお願いしました。

主催者を代表して大石剛静岡新聞社社長は「地域のための活性化に資するよう、研究や提言活動に取り組みたい」と挨拶、岡野光喜代表幹事は「県東部の地域の特長を生かした活性化策について、政策提言など官民一体で取り組んでいきたい」と強調しました。活動方針を報告説明した伊東哲夫運営委員長は「2018年度も継続して、地域振興のための支援を継続していきたいので、ご理解とご協力をお願いしたい」と意欲を示されました。

主催者代表あいさつ



静岡新聞社社長

大石 剛

風が薫るさわやかな季節です。ただ、さわやかな季節とは裏腹に、それまで核・ミサイル開発を続けてきた北朝鮮が、急に方針転換をしました。南北首脳協議を終えて、さらに米朝首脳会議へと進んでいることを連日伝えています。また国内では森友・加計問題、財務次官や自衛隊日報の問題など、政界も大きく揺れています。

さて、今年の総会の記念講演として、作家の林真理子さんをお迎えしています。皆様ご存知の通り大河ドラマ「西郷どん」の原作をお書きなされた方です。多忙な毎日の中で、作家というご自身のお仕事についてお話をいただけるということです。私たちのビジネスや生活にも、多くのヒントをいただけるのではないかと期待をしております。

当懇話会の活動も今年で24年目を迎えました。地域の活性化策の提言団体としての歴史を重ね、これまでいくつかの提言を実現することが出来ました。これも会員の皆様方の熱意とお力のお陰だと思えます。継続することは力と言われます。今後も地域の方々を主役に、地域に密着した、地域のための活性化に資するよう、研究や提言活動に取り組みたいと思えます。

懇話会代表あいさつ

サンフロント21懇話会は、静岡県東部の各エリアの地域の特長を生かした活性化策について、政策提言など官民一体で取り組んでいます。これは、国が掲げております「地方創生」に先んずるものと自負をしております。こうした活動を四半世紀と長く続けてこられたのは、ひとえに会員の皆様のご協力のおかげであり、深く感謝申し上げたいと思えます。

さて、今年度の活動方針に関しては、2020年東京五輪パラリンピックの自転車競技・伊豆市開催に加え、ロードレースが富士山麓の裾野市や御殿場市を周回し、ゴールが小山町となるコースに決まりました。五輪やパラリンピックが県内で開催されるといった、これまでにない大きなチャンスとなると思えます。ぜひ海外との交流も広め、多面的な支援を行い、地域の振興につなげていきたいと考えます。

また伊豆の魅力を広める日本遺産申請支援の継続やスポーツ産業の推進、セルロースナノファイバー実用化に向けた認知度向上への支援、ファルマバレー・アグリイノベーションプロジェクトの推進など積極的に行っていきたいと思えます。基本方針を具体化し、提言や企画推進につなげていきたいと考えます。

サンフロント21懇話会
代表幹事

岡野 光 喜

2018年度 活動方針

2018年度のサンフロント21懇話会は、中長期的な観点から継続していく提言や各活動の支援に関し、活動テーマを以下の4点にまとめました。

- 地域創生につながる新産業創出を支援
- 新たな観光価値創造への取り組みを支援
- 動物愛護と福祉思想の普及活動支援と新たな展開
- 「原・浮島地区まちづくり構想」実現を支援

■地域創生につながる新産業創出を支援

2020年東京五輪・パラリンピックは自転車競技のトラック・MTBの伊豆市開催に加え、ロードレースも富士山麓を周回して小山町の富士スピードウェイにゴールします。五輪開催を新たなスポーツ人口拡大とサイクルスポーツを軸とした新産業創出の機会とするとともに、サイクルツーリズムをはじめとする新たな観光交流の促進、既存産業のスポーツ分野参入、行政の広域連携推進などを支援していきたいと考えます。

沼津市の農業先端技術研究拠点A O I - P A R Cは、「農・食・健」の連携により農業の先端技術を開発し、農業の生産性革新を図るアグリ・オープンイノベーションプロジェクトの拠点です。静岡県が掲げる健康寿命延伸および新産業創出の視点から、ファルマバレー・プロジェクトとアグリ・オープンイノベーションプロジェクトとの連携を視野に入れ、その取り組みを支援します。

木材繊維を高度にナノ化したセルロースナノファイバー（CNF）は、CO₂排出規制が強化される中、部材の軽量化が可能で環境負荷を下げる事が期待できることから、経済産業省は2030年に国内のCNF市場を1兆円に育てる目標を掲げています。富士市など紙パルプの製紙業の蓄積

があり、CNF事業拠点になり得る可能性が高いと考えられます。将来の自動車や航空機産業での活用に向け、認知度向上や多様な用途開発研究を支援していきます。

■新たな観光価値創造への取り組みを支援

2017年度は伊豆市、河津町、県と連携し、伊豆の魅力に関する日本遺産申請を支援してきました。2018年度も引き続き申請の支援をしていきます。これまでの「わさび」に加えて、川端康成など「伊豆の文豪」も加え、幅広く伊豆の魅力についてストーリー展開する申請の支援を継続します。

伊豆縦貫自動車道は2018年度に下船原まで伸びます。天城越え区間も固まり、格段の観光振興が期待されます。広く観光価値創造への支援をしていきたいと思えます。

伊豆の国市の「葦山反射炉ガイダンスセンター」に続き、2017年12月には富士宮市に「富士山世界遺産センター」がオープンしました。伊豆半島ジオパークも2018年4月に正式に「世界ジオパーク」としてユネスコから認定を受けました。活用に向けた支援策を検討していきます。

■動物愛護と福祉思想の普及活動支援と

新たな展開

当懇話会が進める動物愛護の啓発支援活動は、特定非営利活動法人「人と動物のハッピーライフ」の設立とセミナーの定期開催などを通じた啓発活動へと発展してきました。また、2017年4月に長泉町に開院した動物の先端医療を行う動物先端医療センターは、産学との共同研究を進めるなど、東部地域は名実ともに「人と動物が共に生き・幸せに暮らせるまちづくり」としての内容を備えるまでになってきました。

引き続き、動物に優しい地域づくりための支援を行うとともに、人と動物の共生に関わる新産業創出の可能性にも着目していきます。

■「原・浮島地区まちづくり構想」実現を支援

サッカーのアスルクラロ沼津はJ3リーグで好成績を収めています。今後J2リーグ、さらにアスルが10年後を目指しているJ1リーグへの昇格に向けては、現在のホームである県営愛鷹広域運動公園の競技場は手狭で、交通の便が悪いことから駅近辺への新スタジアム建設を望む声が地域から挙がっています。またこれまで水害懸念などで開発が遅れていた原・浮島地区が、新放水路や東名、新東名のスマートインター整備、東駿河湾環状道路の西進などで、開発可能性が高まっています。懇話会では地元の沼津市商工会の要請を受け、道の駅や新スタジアム、新旅客駅を含めた「原・浮島地区まちづくり構想」を2017年秋、県知事と沼津市長に提言しました。18年度以降も構想実現に向けて支援をしていきます。

記念講演

「作家の仕事は読者の視点で」

作家 林 真理子氏



作家・林真理子氏に「私の仕事から」と題して、代表作を題材に小説の着想を得る過程や執筆時の心境を語っていただきました。（ご本人の希望で要旨のみ掲載）

NHKの大河ドラマ「西郷（せご）どん」の原作小説は「正妻」の執筆時に集めた幕末に関する資料を原点とし、4人の編集者とチームを組み、識者からレクチャーを受けました。塩野七生さんの「ローマ人の物語」と同じ方式です。読者の視点で、分からない点を一つ一つ解いていったという創作のプロセスになっています。

また日本経済新聞で連載している「愉楽にて」については、すごく気を張って書いています。高級ホテルの風呂おけの大きさや、登場人物が茶を立てるシーンの茶わんの種類など、細部にわたってリアリティーを追求する創作姿勢でいます。

90歳を超えてなお執筆を続ける瀬戸内寂聴さんに「後世に残る本を書かなければ駄目」と言われたことが印象に残っています。今までに200冊以上出版していますが、自分には代表作はまだないと思っています。生きている間に必ず書きたいです。

ラジオマイトーク

【平成30年7月8日放送】



地域で子育てをする環境を

はな どう はる み

花堂晴美氏

子育て支援ネットワーク
「スイートピー」代表
清水町議会議員

▽モットー 生まれてきてくれてありが
とう、誠実、諦めない
▽趣味 歌(ミュージカル)
▽出身地 三島市

〈お話のポイント〉

◆三島生まれの三島育ちで、結婚してから清水町に住んでいます。小さいころから子供に関する仕事に就きたいと思っていました。大学は高校の先生の勧めもあり、音大に進学、卒業後、保育の道が諦めきれず他の大学で学び直しました。

♥平成9年に子育て支援リトミックサークル「スイートピー」を設立しました。当時は子育て支援センターなどの施設は全くなく、親子の絆づくりの場を作って欲しいとの要望からスタートしました。現在は、ボランティアスタ

ッフ5名が主となり企画・運営しております。
◆子育て中のお母さんで孤立している人がたくさんいます。孤立は、子育て不安、虐待など様々な問題につながります。子育て課題を共有し、社会全体、地域全体で子育てをする環境を作っていきたいと思います。

♣町議会議員として、現在東京の大学院に通い、地方自治、財政などを学んでいます。議員、行政職員、民間人など様々な立場の人たちと社会課題を考え、意見を出し合いながら、刺激を受けています。

ラジオマイトーク

【平成30年9月2日放送】



伊豆地域の魅力を発信

かみ やま まさ ゆき

神山正之氏

静岡県東部地域局
伊豆観光局長

▽モットー 得意淡然失意泰然、
着眼大局着手小局
▽趣味 読書、ウォーキング
▽出身地 静岡市

〈お話のポイント〉

◆伊豆地域の魅力を探し出し、磨きをかけて、行政、観光協会などの関係機関と連携し、より魅力ある観光地域になるよう取り組んでいます。ホテル旅館の若手経営者、アクティビティ事業者などとランチミーティングを通じ、意見交換を行い、課題テーマを抽出して施策へと反映しています。

♥2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは自転車競技のうちトラックレースとマウンテンバイクは伊豆市のサイクルスポーツセンターで、ロードレースは小山町の富士スピードウェ

イがゴールになります。自転車競技4種目のうち3種目が県東部・伊豆で開催されます。多くの外国人観戦客が訪れると予想されますので国内外へ伊豆の魅力を発信するチャンスです。
◆3月に世界農業遺産に「静岡水わさびの伝統栽培」が、4月には世界ジオパークに伊豆半島ジオパークが認定され、伊豆の魅力は大幅にアップしました。

♣伊豆各地で若い人が地域を元気にしようとする動きも出てきました。伊豆観光局としてもサポートしていきたいです。

■新たに入会された方

| | | |
|------------------------|---------|-------|
| ◇(株)平安 | 代表取締役 | 中野 宰孝 |
| ◇(株)フジテック | 代表取締役 | 渡邊偉佐男 |
| ◇ニッピコラーゲン工業(株) | 常務取締役 | 小林 祥彦 |
| ◇(株)片岡屋 | 代表取締役社長 | 木下 好雄 |
| ◇(一社)静岡県環境資源協会 | 専務理事 | 平井 一之 |
| ◇(株)エンビプロ・ホールディングス | 代表取締役社長 | 佐野 富和 |
| ◇富士市産業支援センター f - B i z | センター長 | 小出 宗昭 |
| ◇静宏産業(株) | 代表取締役 | 相吉 三宏 |
| ◇(株)共和 | 代表取締役 | 伊藤 稔 |
| ◇(株)センス | 代表取締役 | 阿武野康広 |
| ◇(株)ホテルニューアカオ | 代表取締役社長 | 赤尾 宣長 |
| ◇FDブレイン&コンシェルジュ | 代表 | 杉山 英文 |
| ◇ユニプレスモールド(株) | 代表取締役社長 | 高木 宣明 |

■肩書の変更

| | | | | |
|---------------------|---------|---|-----------|-------|
| ◇(株)TOKAIケーブルネットワーク | 取締役 | → | 常務取締役 | 近藤 雄二 |
| ◇(株)トーヨーアサノ | 代表取締役会長 | → | 相談役 | 植松 眞 |
| ◇(株)静岡新聞社 | 取締役社長室長 | → | 常務取締役 | 大須賀紳晃 |
| ◇静岡放送(株) | 取締役報道局長 | → | 取締役報道制作局長 | 伊藤 充宏 |

■社名の変更

◇常葉大学富士キャンパス → 常葉大学静岡草薙キャンパス

■会員の变更

| | | | | | |
|--------------|---------|----------------|---|----------|-------|
| ◇沼津市商工会 | 会長 | 大村 保二 | → | 会長 | 渡邊 好孝 |
| ◇静岡県信用保証協会 | 常務理事 | 村松 治 | → | 常務理事 | 片山 倫一 |
| ◇(株)静岡中央銀行 | 相談役 | 奥田 一 | → | 代表取締役社長 | 清野 眞司 |
| ◇富士宮信用金庫 | 理事長 | 井出 和秀 | → | 理事長 | 山本 勝則 |
| ◇スルガ銀行(株) | 本店長 | 小川 俊行 | → | 本店営業部部長 | 榊原 昌利 |
| ◇静岡放送(株) | ラジオ局長 | 原 尚弘 | → | 取締役ラジオ局長 | 小澤 誠 |
| ◇(株)静岡新聞社 | 取締役編集局長 | 植松 恒裕 | → | 編集局長 | 荻田 雅宏 |
| ◇(株)静岡新聞社 | 取締役社長室長 | 大須賀紳晃 | → | 社長室長 | 石川善太郎 |
| ◇(株)静岡新聞社 | 東部総局長 | 海野 俊也 | → | 取締役東部総局長 | 植松 恒裕 |
| ◇(株)大丸松坂屋百貨店 | 店長 | 松坂屋静岡店 白井 満 | → | 店長 | 池沢 憲司 |
| ◇(株)関電工 静岡支社 | 静岡支社長 | 静岡支社長 亀山 昌美 | → | | |
| (株)関電工 静岡支店 | 執行役員 | 静岡支店長 | | | 福島 英明 |